



# ROTTERDAM PHILHARMONIC ORCHESTRA

Lahav Shani, Chief Conductor

Japan Tour 2023

ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団

首席指揮者：ラハフ・シャニ

2023年 日本公演

## Program

### 6月23日(金)19:00 東京 サントリーホール

June 23 Fri. 19:00 Tokyo Suntory Hall

#### メンデルスゾーン／ラハフ・シャニ編曲：『無言歌集』より

「失われた幸福」ハ短調(第3巻Op.38-2); 「ヴェネツィアの舟歌第1番」ト短調(第1巻Op.19-6); 「紡ぎ歌」ハ長調(第6巻Op.67-4)

F. Mendelssohn / arr. Lahav Shani: from "Songs Without Words"

Lost Happiness Op.38-2; Venetian Gondola Song Op.19-6; Spinning Song Op.67-4

#### チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.35 (ヴァイオリン：諏訪内晶子)

P.I. Tchaikovsky: Violin Concerto in D major, Op.35

(Violin: Akiko Suwanai)

第1楽章：アレグロ・モデラート — モデラート・アッサイ

1st Mov.: Allegro moderato — Moderato assai

第2楽章：カンツォネッタ、アンダンテ

2nd Mov.: Canzonetta. Andante

第3楽章：フィナーレ、アレグロ・ヴィヴァチッシモ

3rd Mov.: Finale. Allegro vivacissimo

#### ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 Op.68

J. Brahms: Symphony No.1 in C minor, Op.68

第1楽章：ウン・ポーコ・ソステナート — アレグロ

1st Mov.: Un poco sostenuto — Allegro

第2楽章：アンダンテ・ソステナート

2nd Mov.: Andante sostenuto

第3楽章：ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ

3rd Mov.: Un poco allegretto e grazioso

第4楽章：アダージョ — ビウ・アンダンテ

4th Mov.: Adagio — Piu andante

— アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ

— Allegro non troppo ma con brio

\*当初予定の曲目より変更がございます。

### 6月26日(月)19:00 東京 東京芸術劇場コンサートホール

June 26 Mon. 19:00 Tokyo Tokyo Metropolitan Theatre Concert Hall

#### ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 Op.30 (ピアノ：藤田真央)

S. Rachmaninov: Piano Concerto No. 3 in D minor, Op.30

(Piano: Mao Fujita)

第1楽章：アレグロ・マ・ノン・タント

1st Mov.: Allegro ma non tanto

第2楽章：インテルメッツォ、アダージョ

2nd Mov.: Intermezzo. Adagio

第3楽章：フィナーレ、アツラ・ブレーヴェ

3rd Mov.: Finale. Alla breve

#### チャイコフスキー：交響曲第6番 ロ短調 Op.74「悲愴」

P.I. Tchaikovsky: Symphony No. 6 in B minor, Op.74, "Pathétique"

第1楽章：アダージョ — アレグロ・ノン・トロッポ

1st Mov.: Adagio — Allegro non troppo

第2楽章：アレグロ・コン・グラツィア

2nd Mov.: Allegro con grazia

第3楽章：アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ

3rd Mov.: Allegro molto vivace

第4楽章：アダージョ・ラメントーソ — アンダンテ

4th Mov.: Adagio lamentoso — Andante

主催：ジャパン・アーツ

#### ラハフ・シャニ指揮 ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団 2023日本公演

6月22日(木)松戸 聖徳大学川並香順記念講堂(学校公演・非公開) 主催：聖徳学園 ☆

6月23日(金)東京 サントリーホール 主催：ジャパン・アーツ ☆

6月24日(土)所沢 所沢市民文化センター ミュズアークホール 主催：(公財)所沢市文化振興事業団 ★

6月25日(日)大阪 ザ・シンフォニーホール 主催：ABCテレビ ☆

6月26日(月)東京 東京芸術劇場コンサートホール 主催：ジャパン・アーツ ★

6月27日(火)川崎 ミューザ川崎シンフォニーホール 主催：神奈川芸術協会 ★

☆ヴァイオリン：諏訪内晶子 ★ピアノ：藤田真央

協力：ワーナーミュージック・ジャパン、ユニバーサル・ミュージック、ソニー・ミュージックジャパン インターナショナル

#### ラハフ・シャニ (首席指揮者)

Lahav Shani, Chief Conductor



© Marco Borggreve

## Profile

ラハフ・シャニは2018年9月にヤニック・ネゼ＝セガンよりバトンを引き継ぎ、楽団史上最年少でロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者に就任した。

2021年シーズンから、シャニはズービン・メータよりイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督の任を引き継いだ。2017/18シーズンにはウィーン交響楽団の首席客演指揮者となり、2015年5月の同楽団でのデビュー以来、2016年1月の大規模なヨーロッパ・ツアーを含む、多数の出演を果たしている。さらにベルリン・シュターツカペレとも定期的に共演し、ベルリン国立歌劇場や交響曲のコンサートでも指揮している。

近年及び今後の主な活動としては、客演指揮者としてベルリン・フィル、ウィーン・フィル、バイエルン放送響、ロンドン響、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ドレスデン・シュターツカペレ、チューリッヒ・トーンハレ管、ブダペスト祝祭管、ボストン響、ベルリン放送響、フィルハーモニア管、バリ管、フィラデルフィア管、ロイヤル・ストックホルム・フィル、バンベルク響、そしてフランス放送フィルとの共演などがある。

シャニは、1989年にテルアビブに生まれ、ハンナ・シャルギのもと6歳でピアノを始め、ブッフマン・メータ音楽学校でアリエ・ヴァルディのもと研鑽を積んだ。その後、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学でクリスチャン・エーヴァルト、ピアノをファビオ・ビディニに師事した。学生時代、ダニエル・パレンボイムからも薫陶を受けた。2013年、バンベルクのグスタフ・マーラー指揮者コンクールで優勝。2016年6月には、指揮者、そしてソロ・ピアニストとしてロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団にデビュー。2018年からの首席指揮者就任が発表されたのは、それから2ヶ月後のことだった。

ピアニストとしては、2018年7月にベルリンのブレーズ・ザールにてソロ・リサイタル・デビューを果たした。フィルハーモニア管、ベルリン・シュターツカペレ、フランス放送フィルなど、多数のオーケストラとピアノ協奏曲を弾き振りしている。また室内楽やリサイタルの演奏経験も豊富で、エクサン・プロヴァンス音楽祭、ケルン・フィルハーモニー、そしてヴェルビエ音楽祭などにも参加。2019年にはワーナーより、ルノー・カピュソンとキアン・ソルターニとの共演によるチャイコフスキーとドヴォルザークのピアノ三重奏曲のCDが発売されている。



Lahav Shani, Chief Conductor

ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団  
Rotterdam Philharmonic Orchestra



© Guido Pijper

Profile

ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団は、極めてエネルギッシュな演奏、高い評価を得ているレコーディング、そして革新的な聴衆へのアプローチで卓越した存在感を放っている。1918年に創立され、ヨーロッパで最も重要なオーケストラのひとつとしての地位を確立している。

草創期を経て、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団は1930年から首席指揮者を務めたエドゥアルド・フリプセのもと、オランダで最も重要なオーケストラのひとつに成長した。1970年代には、ジャン・フルネとエド・デ・ワールトのもと、国際的な評価を獲得。ワレリー・ゲルギエフの就任は新しい時代を花開かせ、2018年からはヤニック・ネゼ＝セガンからラハフ・シャニへと引き継がれている。

デ・ドゥーレン・コンサート・ホールを本拠地としながら、それ以外の場所、地元の会場から国内外の著名なホールなどでも頻繁に演奏している。2010年以来、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団はパリのシャンゼリゼ劇場のレジデント・オーケストラとして活躍。世界各地の地元の会場やコンサートホールで、教育のための演奏や地域のコミュニティ・プロジェクトなどにより、年間15万から20万人の聴衆に音楽を届けており、その中にはかなりの数の若い世代も含まれている。

1950年代のエドゥアルド・フリプセとの画期的なマラー録音以来、数多くのレコーディングを行い、高い評価を獲得している。現在、ドイツ・グラモフォン及びBISレコーズと契約。近年はEMI(現ワーナー)とヴァージン・クラシックス(現エラート)でも録音している。また、オーケストラの歴史的録音を再発売するために自主レーベル ロッテルダム・フィルハーモニック・ヴィンテージ・レコーディングズを設立した。コンサートのライブ配信はオンライン・プラットフォームのMedici.tv.で視聴することができる。コロナウィルスの発生時には、オーケストラはデジタル・コンテンツで聴衆に音楽を届けた。最も注目されたのは、300万回視聴されたベートーヴェンの「歓喜の歌」のステイ・アット・ホーム公演で、世界的なニュースとなった。



ROTTERDAM PHILHARMONIC ORCHESTRA

**Chief Conductor**

Lahav Shani

**Honorary Conductor**

Yannick Nézet-Séguin

**Assistant Conductor**

Bertie Baigent

**Artist in Residence**

Daniil Trifonov

**First Violin**

Igor Gruppman,  
Concert Master  
Marieke Blankestijn,  
Concert Master

Quirine Scheffers  
Hed Yaron Mayersohn  
Saskia Otto

Arno Bons  
Mireille van der Wart  
Cor van der Linden  
Rachel Browne  
Maria Dingjan  
Marie-Jose Schrijner  
Noemi Bodden  
Petra Visser  
Sophia Torrenga  
Hadewijch Hoffland  
Annerien Stuker  
Alexandra van Beveren  
Koen Stapert

**Second Violin**

Charlotte Potgieter  
Cecilia Ziano

Frank de Groot  
Laurens van Vliet  
Tomoko Hara  
Elina Hirvilammi-Staphorsius  
Jun Yi Dou  
Bob Bruyn  
Eefje Habraken  
Maija Reinikainen  
Wim Ruitenbeek  
Babette van den Berg  
Melanie Broers

**Viola**

Anne Huser  
Roman Spitzer

Maartje van Rheeden  
Galahad Samson  
Kerstin Bonk  
Lex Prummel  
Janine Baller  
Francis Saunders  
Veronika Lenártová  
Rosalinde Kluck  
Léon van den Berg  
Olfje van der Klein

**Cello**

Emanuele Silvestri  
Eugene Lifschitz

Joanna Pachucka  
Daniel Petrovitsch  
Mario Rio  
Ge van Leeuwen  
Eelco Beinema  
Carla Schrijner  
Pepijn Meeuws  
Yi-Ting Fang

**Double Bass**

Matthew Midgley  
Ying Lai Green

Jonathan Focquaert  
Harke Wiersma  
Robert Franenberg  
Arjen Leendertz  
Ricardo Neto

**Flute**

Juliette Hurel  
Joséphine Olech

Desiree Woudenberg

**Flute/Piccolo**

Beatriz Baião

**Oboe**

Remco de Vries  
Karel Schoofs

Anja van der Maten

**Oboe/Cor Anglais**

Ron Tjhuis

**Clarinet**

Julien Hervé  
Bruno Bonansea

**E-flat Clarinet/Clarinet**

Vacancy

**Clarinet/Bass Clarinet**

Romke-Jan Wijmenga

**Bassoon**

Pieter Nuytten  
Lola Descours

Marianne Prommel

**Bassoon/Contra-bassoon**

Hans Wisse

**Horn**

David Fernández Alonso  
Felipe Santos Freitas

Wendy Leliveld  
Richard Speetjens  
Laurens Otto  
Pierre Buizer

**Trumpet**

Alex Elia  
Vacancy

Simon Wierenga  
Jos Verspagen

**Trombone**

Pierre Volders  
Alexander Verbeek

Remko de Jager

**Bass Trombone/  
Contra-Bass Trombone**

Rommert Groenhof

**Tuba**

Hendrik-Jan Renes

**Timpani/Percussion**

Danny van de Wal

Ronald Ent  
Adriaan Feyaerts  
Martijn Boom

**Harp**

Charlotte Sprenkels





諏訪内晶子 (ヴァイオリン)  
Akiko Suwanai, Violin

© TAKAKI KUMADA

## Profile

1990年史上最年少でチャイコフスキー国際コンクール優勝。これまでに小澤征爾、マゼール、デュトワ、サヴァリッシュ、ゲルギエフらの指揮で、ボストン響、フィラデルフィア管、パリ管、ロンドン響、ベルリン・フィルなど国内外の主要オーケストラと共演。BBCプロムス、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン、ルツェルンなどの国際音楽祭にも多数出演。

近年ではゲルギエフ指揮ロンドン響とのツアー、パリ管とのヨーロッパおよび日本ツアー、チェコ・フィルとの中国ツアーを行い、オスロ・フィル、バンベルク響、デトロイト響、トゥールーズ・キャピトル管とも共演。

現代作曲家作品の紹介も積極的に行い、これまでにエサ=ベッカ・サロネン作曲「ヴァイオリン協奏曲」の日本初演(2013)、エリック・タンギ作曲「In a Dream」の世界初演およびフランス初演(2013)、キャロル・ベッファ作曲「ヴァイオリン協奏曲-A Floating World-」の世界初演(2014)などに取り組んでいる。

2012年、2015年、エリーザベト王妃国際コンクール、2018年ロンティボー国際コンクール、2019年チャイコフスキー国際コンクールヴァイオリン部門審査員。2012年より「国際音楽祭NIPPON」を企画制作し、同音楽祭の芸術監督を務めている。2024年1~2月には「国際音楽祭NIPPON2024」の開催が予定されている。

レコーディングでは、デッカ・ミュージック・グループとインターナショナル・アーティストとして専属契約を結んでおり、最新作「J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ&パルティータ(全曲)」を含む15枚のCDをリリースしている。

桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコース修了。文化庁芸術家在外派遣研修生としてジュリアード音楽院本科及びコロンビア大学に学んだ後、同音楽院修士課程修了。国立ベルリン芸術大学でも学び、2021年学術博士課程修了、ドイツ国家演奏家資格取得。

使用楽器は、日本にルーツをもつ米国在住のDr.Ryuji Uenoより長期貸与された1732年製作のガールネリ・デル・ジェズ「チャールズ・リード」。



Akiko Suwanai, Violin



藤田真央 (ピアノ)  
Mao Fujita, Piano

© Dovile Sermokas

## Profile

2017年、弱冠18歳で第27回クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクール優勝。併せて「青年批評家賞」「聴衆賞」「現代曲賞」の特別賞を受賞。

2019年チャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞し、審査員や聴衆から熱狂的に支持され、世界の注目を集めた。

繊細かつヴィルトゥオーゾを持ち合わせ、自然体で奏でられる唯一無二の美しい音色が高く評価され、次々と世界の舞台に招かれる。ルツェルン音楽祭、ヴェルビエ音楽祭、ラ・ロック=ダンテロン国際ピアノフェスティバル、ツィナングリ音楽祭など主要な音楽祭へ定期的に出演。

2023年1月には、カーネギー・ホールにてホール主催のソロ・リサイタルデビューを果たす。

最近および今後共演のオーケストラは、ゲヴァントハウス管、ベルリン・コンツェルトハウス管、ミュンヘン・フィルハーモニー管、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、フランス放送フィル、ロイヤル・フィルハーモニー管、イスラエル・フィル、RAI国立響、ミラノ・スカラ座管、読売日本交響楽団、東京都交響楽団。さらにはクリストフ・エッセンバッハ、リカルド・シャイー、アンドリス・ネルソンス、ヴァシリー・ペトレンコといった指揮者たちからの信頼も厚い。

2021年11月、ソニークラシカル・インターナショナルと専属レコーディングのマルチアルバム契約を締結した。2021年ヴェルビエ音楽祭でのモーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲演奏が好評を博し、2022年10月にはスタジオ録音による待望のモーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲集をリリースした。

2023年7月には、モーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲演奏会でロンドンのウイグモア・ホールへのデビューが予定されている。



Mao Fujita, Piano

## メンデルスゾーン／ラハフ・シャニ編曲：『無言歌集』より

「失われた幸福」ハ短調(第3巻 Op.38-2)

「ヴェネツィアの舟歌第1番」ト短調(第1巻 Op.19-6)

「紡ぎ歌」ハ長調(第6巻 Op.67-4)

メンデルスゾーン(1809-47)は生涯にわたってピアノのための多数の無言歌を作曲し、それらは各6曲ずつの8つの曲集に纏められている。無言歌とは歌曲のように叙情的な旋律と伴奏が一体となった小品で、1曲ごとに彼のロマン的な美質が発揮されている。それぞれ作品の性格を表す曲題で親しまれているが、そのほとんどは出版社や他人が付けた通称である。本日は指揮者シャニ自身の管弦楽編曲によって、ノスタルジックな趣を持つ「失われた幸福」、波を思わせる伴奏上で哀感を帯びた旋律が歌われる「ヴェネツィアの舟歌第1番」(この曲題は作曲者自身による)、無窮動的な伴奏上に軽やかな旋律が浮かび上がる「紡ぎ歌」の3曲が演奏される。

## チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.35

チャイコフスキー(1840-93)の代表作のひとつであるこの協奏曲は1878年に書かれた。彼はこれをロシアの名手アウアーに初演してもらおうつもりだったが、アウアーは作品をこきおろし、初演も拒絶する。結局1881年ウィーンでプロツキーが初演するが、不評に終わった。しかし作品の真価を見抜いたプロツキーは各地でこの作品を紹介し、曲は高く評価されるようになる。豊かなロシア情緒が技巧的な独奏とシンフォニックな管弦楽のうちに生かされた傑作で、アウアーも後に認識を改めて自ら演奏するようになった。

**第1楽章**(アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ)はおおらかな主題を持つ長大な楽章で、展開部の最後にカデンツァが置かれる。**第2楽章**(カンツォネッタ、アンダンテ)は哀感に満ちた緩徐楽章。**第3楽章**(フィナーレ、アレグロ・ヴィヴァチッシモ)は民俗舞曲風の主題を中心に力強く華やかに発展する。

## ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 Op.68

ブラームス(1833-97)が最初に交響曲を構想したのは初期の1855年前後だった。しかし生来の自己批判的な性格に加え、尊敬するベートーヴェンの交響曲を強く意識していたことで、創作は難航する。多くの試行錯誤の末、交響曲第1番が結実するのは最初の構想から実に約20年も経た1876年のことで、同年初演されたが、ブラームスはまだ満足できず、翌年に第2楽章を大幅に改作、決定稿が出来上がった。まさに難産の末に生み出された交響曲処女作であるが、ベートーヴェン風の暗→明の構図による古典的論理性を土台としつつ、その中に豊かなロマン的情緒を表現したこの作品には、ブラームスが長年追い求めた自らの交響曲様式が見事に結実している。

**第1楽章**(ウン・ポーコ・ソステヌート～アレグロ)は緊迫した序奏に始まり、その序奏の緊張感が主部に受け継がれて、闘争的な展開が繰り広げられる。**第2楽章**(アンダンテ・ソステヌート)はロマン的叙情に満ちた緩徐楽章。**第3楽章**(ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ)は間奏風の

楽章。**第4楽章**(アダージョ～ピウ・アンダンテ～アレグロ・ノン・トロoppo・マ・コン・プリオ)は不安な緊迫感の漂う序奏に始まるが、やがて霧を晴らすようなホルンの旋律と荘重なコラールが奏された後、明朗な第1主題が示されて主部に入り、晴れやかに発展しながら大きな高揚をみせる。

## ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 Op.30

ロシアの作曲家で大ピアニストでもあったセルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)のピアノ作品は、ロシア的な情緒とピアノの鮮やかな技巧の結び付きを特徴とする。ピアノ協奏曲第3番は彼のそうした特質が十分に発揮された傑作で、1907年頃当時滞在していたドレスデンで着手され、帰国後に本格的に作曲に取りかかり、1909年から翌年にかけて予定されていたアメリカ演奏旅行で自ら演奏するための曲として筆が進められた。最終的な完成は1909年アメリカにおいてなされている。ロマン派の協奏曲様式を受け継ぎつつ、ロシア的な情感をロマンティックな作風のうちに打ち出している点は前作の有名なピアノ協奏曲第2番と共通するが、第2番よりもさらにピアノの技巧的な難しさが増し、ピアニストにとっては難曲中の難曲に数えられる作品となっている。

**第1楽章**(アレグロ・マ・ノン・タント)は両手のユニゾンによるシンプルな主題に始まるが、叙情的な第2主題や劇的な展開部など全体は起伏に満ちた発展を繰り広げる。**第2楽章**(インテルメツ、アダージョ)はメランコリックな暗い雰囲気を持つ緩徐楽章で、次第に動きを増していく。そのまま休みなく続く**第3楽章**(フィナーレ、アッ・ブレーヴェ)は活力に満ちた主題に始まる技巧的なフィナーレで、情緒溢れる第2主題とともに、変化に富んだ鮮やかな展開が織り成される。

## チャイコフスキー：交響曲第6番 ロ短調 Op.74「悲愴」

チャイコフスキー(1840-93)にとって最後の交響曲となったこの第6番は激烈なまでの悲劇性を打ち出した作品である。そのことはドラマティックな起伏に満ちた第1楽章の暗い性格や、伝統的な様式を逸脱してまで悲痛な緩徐楽章(“ラメントーソ＝悲しく、悼んで”と記されている)をフィナーレとした点に端的に示されている。この作品に込められた悲劇的意味合いについては、彼自身初演(ロシア旧暦で1893年10月16日)の指揮をとったわずか9日後に急逝したこともあって、様々な憶測も生れた。彼自らこの交響曲の裏には標題的意味があることを認めていたのだが、結局その内容は明らかにしなかった。このように謎めいた点の多い作品ではあるが、それゆえにいっそうこの交響曲は、その強烈な訴えかけに満ちた迫真的表現と相俟って、多くの人の心を惹き付けてきたといえるだろう。

**第1楽章**(アダージョ～アレグロ・ノン・トロoppo)は沈鬱な序奏に続いて、不安と慰めと闘争性が入り交じる主部がドラマティックな発展を繰り広げる。**第2楽章**(アレグロ・コン・グラツィア)は優美さの中に憂鬱を秘めた5拍子のワルツ。**第3楽章**(アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ)はスケルツォとマーチを結び付けた楽章で、その賑やかな明るさは次の楽章の悲劇性をいっそう際立たせる。一転して**第4楽章**(アダージョ・ラメントーソ～アンダンテ)は悲痛な情調に満ちたフィナーレ。最後近く死を示すタムタムが響き、息絶えるような終結に至る。